

賀川豊彦の自然による幼児教育

——「幼児自然教案」の分析を中心に——

学校教育開発学コース 福元 真由美

Preschool Education of Nature by Toyohiko Kagawa
——A Critical Review of “Teaching Plan of Nature for Infant” (1933)——

Mayumi FUKUMOTO

Toyohiko Kagawa (1888-1960) is a well-known leader of religion, labor movement, farm laborer movement and cooperative union movement. While he was also engaged in preschool education all his life. He established Matuzawa Kindergarden (1931) and originated “Teaching Plan of Nature for Infant” (1933), by which he promoted children to encounter natural phenomena and things. The plan was constituted of two challenges, diversification of children’s learning experiences and redefinition of the place called kindergarden. The two purposes were excuted throught having infant appreciate Christian Love. After the Great Earthquake of 1923, Kagawa keenly recognized love of one’s neighbors and spirit of “Shakai Kaizo” by organizing cooperative unions. The plan was characterized with two features. The first was diversification of children’s learning experiences, which was composed of three special fields of art, scientice and religion. The second was connection of children spirits with Christian Love making intimate relationship with nature. It was this connection where Kagawa intended to establish fundamental base for “Shakai Kaizo”. At this point this paper refer to some hazardous ideas embedded his conception of unification nature and love bacause, on the very conception, he sympathized with the dominant ideology at the time of World War II.

目次

はじめに

I. 「幼児自然教案」を支えた「自然」認識と社会的実践

A. 賀川の「自然」認識の形成

B. 「社会改造」の課題意識と幼児教育への関心

II. 「幼児自然教案」の2つの契機

A. 松沢幼稚園の設立

B. 「幼児自然教案」における3つの学習経験

C. 幼稚園という場の再定義

III. 戦時期の賀川

おわりに

はじめに

「幼稚園は不思議な使命をもって世界に生まれ出た。そ

の幼稚園の児童にフレーベル氏は自然を教えようとした」¹⁾という賀川豊彦(1888-1960年)は²⁾, 労働運動, 農民運動, 宗教活動, 協同組合運動において著名だが, 同時に終生幼児教育に携わった人物でもある。賀川は1931年, 東京府荏原郡松沢村(現世田谷区)の自宅の敷地内に松沢幼稚園を設立し, 1933年「幼児自然教案」を作成, 発表して自然を題材とする幼児教育に精力的に取り組んでいた。彼の教案に特徴的なのは, 自然が, 神秘主義やキリスト教を背景に審美的, 道徳的な観念において認識された点である。すなわち, 神の創造した芸術品として愛好, 鑑賞の対象であり, かつ万物の法則に神の摂理を見いだす媒体という意味で, 自然は神や人の「愛」と結合して把握されていた。この「愛」と一体化した自然の捉え方を賀川の「自然」認識と理解するならば, 彼はこの認識に基づいて, どのような教案の内容と構成を考案し, 「不思議な使命」を果たす幼稚園という場を組織しよ

うとしたのだろうか。

そこで本研究は、賀川の「幼児自然教案」の分析を中心に、彼の「自然」認識より生じた幼児教育の二つの契機として、(1)幼児の学習経験を重層的に組織した点、(2)彼の「社会改造」との関連で幼稚園を意味づけ直した点の二点を明らかにしたい。彼は関東大震災(1923年)直後、被災地の救護活動に駆けつけ、本所区(現墨田区)に設立した本所基督教産業青年会のセツルメントを通じて、住民主体の協同組合の組織による「社会改造」を目指した。しかし、都会の個人的享乐的な精神文化の再興に失望し、基督教の「隣人愛」を原理とする相互扶助関係を構築するために、宗教道徳の普及、定着の方法として教育を重視していく。そこで「幼児自然教案」は、自然の事物や事象を媒介に、幼児にこの宗教的「愛」の道徳規範を内面化させるために考案されたのだった。教案は、(1)幼児の自然に関する学習経験を芸術的、科学的、宗教的の三つの側面から重層的に組織し、自然の教育可能性を多義的な意味で捉えた点、(2)幼稚園を実社会の人間関係の編み直しを図る創造的な関係の生成の場として意味づけた点、の二点において幼児期における自然の教育の一つの画期的試みをなしたといえる。

賀川の自然による教育に関する先行研究は、これまで量的にも非常に少なかった。わずかにそこに指摘されたものも、彼が教案で自然を幼児の活動の中心にすえた点や、自然の科学的な事柄に価値を見いだした点、自然を通じて神の「愛」を教えようとした点であり、これらの肯定的な評価がなされているにすぎない³⁾。ここでは、教案の内容、構成を基礎づける彼の自然の認識の仕方やその認識にはらまれた問題性については触れられてこなかった。本稿では、彼の「愛」と結合した「自然」認識に関し、上述の幼児教育の試みを生み出す可能性を捉える一方、総力戦体制における「愛」と「自然」の性格の変容から、戦争遂行の支配的イデオロギーに彼を接近させたその認識自体の危うさに言及することで、彼の「自然」認識の両義性を捉えたい。

ところで「幼児自然教案」は、賀川が松沢幼稚園において考案し、1933年2月基督教保育連盟関東部会で講演された「自然と性格」、同年8月全国保姆連盟講演会における「幼児自然教案」の二講演で発表されたものである。その内容の原型は、すでに彼の長男の養育体験をもとにした著書『魂の彫刻』(1926年)に「自然の聖書による宗教教育⁴⁾」として提出されている。そこで本稿では、先の二つの講演内容にこの著作も含めて教案を検討するための中心的な史料として用いる。

以下本稿の構成は、Iで賀川が「愛」と結合させた「自

然」を見いだす経緯と「社会改造」の課題意識から幼児教育に注目する過程を概観し、IIで彼の「自然」認識により教案に準備された幼児教育の二つの契機を明らかにし、IIIで賀川の戦時期の言動と精神態度を追いながら、彼の「自然」認識の危うさを捉えたい。

I. 「幼児自然教案」を支えた「自然」認識と社会的実践

A. 賀川の「自然」認識の形成

はじめに「幼児自然教案」(1933年)の成立基盤である賀川の「自然」の性格を捉えるために、その特徴として次の2点に注目し、1920年代を通じて自然が神や人間の「愛」と結合して把握されたことを指摘したい。

第1に、賀川にとって自然は、美や精神の癒しを求めて人間が回帰する場として美化された心象風景だった。彼は、徳島中学校時代に『新約聖書』『旧約聖書』に触れて16歳で基督教に入洗し、明治学院高等部神学予科時代に、トルストイ、バイロン、ワーズワース、ラスキン、エマソンなどの著作から基督教や近代西欧の神秘的な自然観、生命観を吸収した⁵⁾。「貧民窟生活者の自然美論」(1920年)で彼は、「自然」が上記の思想家の働きを経て、神から賦与された「芸術」として再認識されたと解釈し、自らも「芸術としての自然の愛好者」として、都市のスラムの無機的空間を嫌い海や河川、山岳の景観や色彩の美に憧れ「自然に帰ってゆく」心情をつづる⁶⁾。つまり、自然は彼にとって、神が創造したという理由で美しく愛でる価値があり、かつ都会の物質文明に浸る人間が憧憬し回帰する場として把握されていた。

この彼の自然回帰の願望は、幼少期の精神的癒しを自然に求めた自身の原体験から、自然の美的な心象風景を生じさせた。4歳で父を、翌年父の妾の母を失った彼は、神戸から徳島の農村にある賀川家本家の祖母、父の本妻に姉とともに引き取られる。この幼児期の親子関係の切断は、彼の苦痛、欲求不満、不安、絶望感のみならず、自己の生の基盤そのものの喪失感を引き起こす経験だったろう⁷⁾。それゆえ「早くから 悲しみの子」だった孤独と悲哀を徳島の大自然に癒された経験は、困難に直面した彼の精神の立ち返る記憶となったのである⁸⁾。『イエスの宗教とその真理』(1921年)で、当時川崎・三菱労働争議で労働者側を指導して敗北した彼は、感傷的な郷愁を伴って徳島の自然を美的な心象風景において語っている。

「阿波の山と河は 私に甦って来た。そして 私は甦り

の子となった。私の一生を通じて 最も涙ぐましいその徳島の空が 私に『愛』を教えてくれた。それは 美しいものである。』⁹⁾

第2に、賀川にとって自然は、自然界の法則性から神の摂理を知る媒体であり、その法則性から人間との調和的な関係で把握されるものだった。1914年から約2年半のアメリカ留学で生物学を学んだ彼は、自然科学の概念や理論を宗教的自然観と重ね合わせて取り入れていた。帰国後の『精神運動と社会運動』(1919年)では、ヘルムホルツの機械論的生理学の「科学的無神論」批判の根拠として、ドリーシュの「新生気論」における「内在的調和」「有目的活力」の進化法則が認められる¹⁰⁾。後の『愛の科学』(1924年)では、「宇宙の不動なる法則」の「絶対性」を「保証」する神の存在と、「科学を通じ」た自然界の法則、すなわち神の「真理」の人間への伝達が明示的になった¹¹⁾。

この神の摂理を表すという自然法則の認識は、人間の生の営みを自然との調和的な関係において把握させるようになる。例えば1924年の大震災の経験においても、自然は人間の脅威や恐怖の対象とは見なされなかった。賀川にとって震災は、機械文明に憤慨した神が日本を「侮辱」した現象であり、彼の「難詰」する相手は神であり自然ではなかった¹²⁾。彼は自らの救護活動を支える神の「力」を、「春先の木々の芽生えに水蓮の花に」ある「法則」に見いだしている。ここでは震災に対する当初の恐怖は、自然の根源に神の調和を感じる感覚から和らぎ、同時に人間と自然との拮抗点は見失われているといえるだろう。そして『神と永遠への思慕』(1931年)に至り、人間の意識や行為の合目的性と自然の秩序の合目的性が、ともに神に由来すると考えられた結果、人間が自然と一体化する神秘的な融合感覚が賀川を捉え、「人間の目的」と「宇宙の目的」は「衝突しない」と見なされるに至ったのである¹⁴⁾。

このように1920年代を通じて自然は、人間の回帰する美的心象風景として「日本人」の「好愛(マツ)を持つ」もの、かつ神の摂理を伝達し人間と調和する存在として「自然の奥に」いる神の「愛がある」ものと見いだされる¹⁵⁾。以下では、このように神や人間の「愛」と結合した自然の捉え方を、賀川の「自然」認識と理解して検討を進めたい。

B. 「社会改造」の課題意識と幼児教育への関心

1926年の『魂の彫刻』以降、子どもの教育が、賀川の「社会改造」との関連で論じられるのは、被災地の住民

に対する宗教的「愛」の道德規範の内面化という課題と関係がある。すでに大正期の労働運動で、資本主義に対抗する「社会改造の根本」を、労働者の主体性の回復と連帯意識の養成の問題と判断した彼は¹⁶⁾、震災後「闇も日本に退屈を感じているではないか」(1924年)で「今度は互助的精神によって、新しき世界を打建つ」ことを目指した¹⁷⁾。このため、本所基督教産業青年会の事業で、住民主体の生産組合、消費組合、信用組合などの協同組合を組織し、個人の利潤追求に傾いた社会経済関係を再編すると同時に、基督教の礼拝説教や聖書研究会のほか、宗教、文学、労働問題など市民教化の文化講演を積極的に行った。『愛の科学』で、「これからの社会運動の基調」を「教育による社会改造」におくとは、基督教の「隣人愛」意識の内面化を通じて、相互扶助を原則に社会の諸関係を再編することを意味していた¹⁸⁾。

このように教育による宗教道德の内面化を重視した結果、賀川は幼児教育に注目するようになった。彼は神の「愛」を至高とする規範意識を純粹に追求したから、実際の教育事業では大人は「固まってしまって教え難い」と、すでに自分なりの思想や価値観を持つ人間の意識改革の困難を痛感せざるをえなかった¹⁹⁾。この意識は、幼児期の教育可能性に大きな期待を寄せ、早期の集中的な教育を重視する考えを生じさせた。『愛の科学』の半年後、早くも彼の個人雑誌『雲の柱』に初めての幼児教育論「宗教教育の原理」(1925年)が掲載され、幼児の「宗教感覚の萌芽」として「最も原始的な、敏感な、荘厳な生命の勇躍に対する直感」を捉えた宗教教育が必要とされるに至った²⁰⁾。

この幼児の宗教道德の獲得が認識されて以降、上述の賀川の「自然」認識における「自然」が、幼児の宗教教育の内容や方法として活用されるようになる²¹⁾。それは『魂の彫刻』の記述のように、幼児をその身体や観念の原始性において「神秘的世界」の体験者と把握し、彼らの「復帰」する「大自然を神の天啓」と見て「愛の法則」を教えることが可能だと考えられたからであった²²⁾。

II. 「幼児自然教案」の2つの契機

A. 松沢幼稚園の設立

1931年に開園された松沢幼稚園は、賀川が、幼児の宗教教育を行う目的で「幼児自然教案」を考案した場所である。この園の設立と教育方針は、第1に「神の愛」を基盤とする地域の精神文化の創出過程に埋め込まれていた点、第2に教育環境を積極的に自然の事物で構成した点、の二点において特徴的であった。

1920年代後半より賀川は、政治的な活動から離れ宗教活動に力を注ぐ傍ら、自然の中での幼児教育と一層距離を近づけることになる。1924年、松沢村に一家で移り住んだ彼は、自宅での伝道集会や宗教講演、日曜学校の開催のほか、欧米視察(1924-25年)や大坂四貫島セツルメントの設立(1925年)に多忙なうえ、眼病のトラホームを悪化させて入院、1926年10月には兵庫県武庫郡瓦木村に静養のため転地した。その一方で、彼は日本農民組合内部の無産政党樹立をめぐる政治闘争を嫌い、日農第二分裂(1927年)頃より、無産政党運動の第一線より手を引いた。そして1929年11月、静養先の瓦木村から、再び武蔵野の松沢村に帰還した後に、児童愛護運動の石田友治らクリスチャンたちの協力で、松沢村の自宅の敷地に松沢教会と附属幼稚園を設立したのである。

賀川たちの意図は、彼ら松沢教会建築実行委員作成の「松沢教会 同幼稚園 日曜学校建築随意書」(1930年)中の記述に読みとることができる。ここには「一町村に於ける社会文化のバロメーターとなる可きものはその土地の精神生活並びに教育機関に関する施設及びその内容如何による」とあり、続いてアメリカ開拓期の清教徒たちが、「先ず教会と学校を建設し「今日の精神文化の基礎」をつくったと記されている²³⁾。すなわち松沢幼稚園は、大人の宗教的修養の場である教会と協同関係にあり、教育により幼児に神の「愛」を認識させ、キリスト教精神を地域に組織的に根づかせるものとして設立されたのである。

さらに賀川自身の全国的な宗教運動の行き詰まり感から、幼児に対する自然の教育に必然的に傾倒していく状況も生じている。1928年「神の国運動」を開始した彼は、キリスト教の信徒数の増加を目的に全国巡回伝道に出たが²⁴⁾、1933年「神の国運動は失敗だったか?」で、周囲の批判、教会組織の問題、運動成果への疑問を記す²⁵⁾。一方、同年の身辺雑記で「幼児自然教案の編集に熱中」する様子や²⁶⁾、翌年「宗教教育に自然教案を提唱す」では、「神の国運動」で実現できなかった少年伝道の一つとして、「神の摂理」を教える「自然教案」の有効性が語られた²⁷⁾。当時の彼は、各地域へのキリスト教の普及、定着のために、教会や講演会での大人対象の布教だけでなく、幼児への宗教教育の必要に迫られていたのである。

つづいて、松沢幼稚園の教育環境は、フレーベルの「キンダーガーデンの『ガーデン』の部分を取返したい。」という賀川の意向から、同時代の幼稚園としては稀なほど豊富な自然の事物で構成されていた²⁸⁾。賀川と親交もあり、隣村に住んでいた徳富蘆花が『自然と人生』(1933年)で描いたように、当時の武蔵野はまだ広い雑木林と田園

風景に囲まれた自然の風情の美しい場所だった²⁹⁾。ここに幼稚園が設立されたこと自体、すでに幼児教育の場を「ガーデン」において準備する意味が込められていたといえる。

それだけではなく、幼稚園には意識的に自然界の動植物や鉱物が持ち込まれ、子どものさまざまな活動を支えていた。幼稚園の保育課程には、「自然観察」を筆頭に、「遊戯」「唱歌」「談話」「手技」「製作」が掲げられ、自然の教育を特色とした教育方針が唱われた³⁰⁾。それを表すように、新館の南側テラス(1932年)には、メジロ、ホオジロ、カケスなど約20種類もの鳥のいる小屋ができ、その横には貝類の標本が多数並べられた。園庭には、82種類の「雑草園」(1934年)と「リンネ植物園」(1937年)があり、蜜蜂、ウサギ、山羊も飼育されていた。さらに「フレーベル館」(1936年)、「ペスタロッツ館」(1939年)という「子供博物館」の棚には、賀川が日本各地や外国から持ち帰った鳥類や虫類の標本、貝類や鉱物の標本が並べられたほか、天井には星座の天体図が描かれ、上からは結晶体の拡大模型が釣り下げられていたという。これらはすべて「自然恩物」と称され、幼児の活動の中心となる教材であった³¹⁾。

B. 「幼児自然教案」における3つの学習経験

賀川の作成した「幼児自然教案」は、彼によればフレーベルの抽象的観念的な恩物教育を「修正」し、自然界の実物や事象を題材とした学習経験を通じて、幼児に「神」を教えるものだった³²⁾。この教案は、自然物を単なる愛玩、観賞や関心を誘発する目的で用いたり、心理学的学習理論の刺激環境と捉えるのではなく、自然の多義的な解釈から、学習を芸術的、科学的、宗教的の三つの方面から重層的に組織した点でとても興味深い。ここでは、キリスト教の「愛」の道德規範を内面化させるために、賀川の「自然」認識における「自然」から、どのような教育の内容と方法が開発されたのか検討したい。

(1) 芸術的方面

教案の「美的教育」では、自然美の体験と表現の二つが課題だった。その目的は、彼らの不安や恐怖など精神の活動力、認識力を抑える感情を解消させ、自由で想像的な活動的精神を支える感情をもたせることにある³³⁾。これは、子どもの宗教感情を養うためであり、賀川が特に宗教教育で重視した点である。もとより、大都市の神戸で宗教教育の失敗経験をもつ彼は、都会の「不良少年」の「心理的慰安」を自然に求めて林間学校を実施してきた³⁴⁾。これが幼児教育にも引き継がれ、自然の中で幼児の

「遊戯本能」を満足させ体験の密度を高める精神的活力を得るために、「憂鬱性とか、圧迫感とか、恐怖、不安、煩悶、憤怒、その他神経衰弱などを、自然界によって治療し「快感」「喜び」を得させることが求められたのである³⁵⁾。

そのうえで、芸術作品を鑑賞するような態度の形成と美的体験の充実が位置づけられていた。彼によれば、植物の芸術的な美は、自然界にある「法則」が「植物界にも同じ秩序を持って現れ」たものとして、幼児の美的な感受性を養う根源とされた³⁶⁾。それゆえ、花や木の葉、鳥の羽根や鳴き声、蝶や貝の模様の美術的音楽的な世界に直接触れさせることは、幼児に「自然が(…)うるわしい一つの芸術」という見方を示すことでもあった³⁷⁾。こうして幼児を「自然に同化」させることは、自然を冷静でさめた知覚によってではなく、対象の事物や出来事の内部に入り込む渾一感によって生き生きと体験させることを意味していたのである³⁸⁾。

このように賀川は、まず自然の事物や光景に対する美的体験を学習活動の基礎においたが、注目したいのは、そこで幼児の身体感覚を重視した具体的な活動を示したことである。教案では、子どもの「智覚本位」に「興味、注意力、観察力を基礎」にして、自然を視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚、運動覚の六つの感覚から経験する方法が採られた³⁹⁾。例えば、鉱物や雪を題材に結晶体を主題にする場合、実物を見る、雪の歌を歌う、鉱物の音を聞く、氷砂糖をなめる、手に直接触れる、結晶体の模型を紙とはさみで作ることが示されている⁴⁰⁾。これは、自然の感覚的な美質を表層的な形質のみで捉えるだけではなく、自然体験の時間的、空間的過程の中で対象のいかなるものかを発見的に見いだすためであった。

次の課題は、幼児の体験した自然美の表現である。その美を成り立たせる特徴として、幼児の体験から発見される事柄は「自然界の方向、調和、目的」とされた⁴¹⁾。手工の例では、自然界の目に見えない法則を形象化させる方法が次のように述べられている。

「幼児に粗雑な観察をさせてはならない。そして実物に出来るだけ似た特長をつかませることが必要である。そして塗絵、切抜き、折紙、貼り紙などをする場合、自然のまゝの美を恩物化することが大事である。(…)自然界は葉序の持つ美的法則を守っているから美しく見えるのである。そういう美的法則を手工を通して子供に教えておきたいのである。」⁴²⁾

ここでは、自然の体験と表現が、幼児の連続した精神

と身体の営みとして把握されると同時に、幼児は自然の体験を表現へと移し変えていく創造的な主体として認識されている。精神的な癒しを基礎とする自然美の体験が、自然界の法則の発見に限定されていたとはいえ、教案が、自然を題材に幼児の体験と表現を有機的に結合させた点は注目に値するだろう。

(2) 科学的方面

「科学と自然教案」では、自然に対する幼児の感性的認識を、自然科学者の知性的認識にも連なるものと把握して、自然を教材化し選択、配列することが主張される⁴³⁾。幼稚園は、自然を科学的に探求する場として構成され、例えば「リンネ植物園」は、植物を下等植物から高等植物まで進化の方向に沿って配列されるなど、示唆的な空間を用意していた。また、植物教材の選択も「植物進化の系統」に基づいて教えるよう指示され、岩石に関しては初年度の珪石、長石、石英、輝石、角閃石に始まり、学年別に段階的に結晶の6系32体を教材化して配列している⁴⁴⁾。

このように、賀川が自然界の進化や法則に即した教材選択、配列を意図したのは、自然の「方向、調和、目的」を捉える幼児の感性は、世界的な自然科学者と共有されるものと考えたからだった。「自然と性格」の中の「力と宇宙目的の世界」の単元で、彼は「宇宙目的の世界」に「方向」があるという認識は、「アインシュタイン、ミリカン、ジーンズ、エジントンなど新しい物理学者の凡てが、その傾向を持っている」と指摘する⁴⁵⁾。彼にとって自然科学は、高度な知識的技術的な操作により機械的に解明されるものではなく、科学者の知的探求心を支える、自然に対する一見非科学的とも思える意味づけを見いだすものだった。さらに、ダーウィンやファールプの幼少期を想起して、自然科学の研究を基礎づける自然との全身接触を重視した彼は、「知識が感じ得ないことを感情は感じ得る」といい、幼児の感情や感覚の知性的な契機を捉えていたといえるだろう⁴⁶⁾。

そして、自然に関する「興味、注意力、観察力」による感性的知覚をもとに、「記憶」「連想」「洞察力」を働かせ、多様な側面から自然現象を比較総合して捉える知的探求のプロセスが、幼児の学習経験として明示された⁴⁷⁾。植物教材の例をあげれば、塗り絵や折り紙の活動では、花の教材の選択、配列をバターカップ、ユリ、アヤメ、ランという順序で系統的組織的に行うことが意識され、幼児の認識活動を方向づける指導の目標や方法が記されている⁴⁸⁾。

「それ(自然の实物:引用者注)を系統的に、特長あるものを頭に入れ、連想させ(…)他との比較を教える。それから、総合的に、例えば、動物植物の進化、全体の位置などを考える。それをまた成長的に、選択させて、名を教える。(…)また連想させたり、記憶させたりすること、判断させることなどは必要なことである。」⁴⁹⁾

このように教案では、自然の事物を進化や系統に秩序立てる活動を通して、自然を科学的に探求する機会を幼児に与え、その法則や調和に対する彼らの認識能力の養成が目指されたのである。

(3) 宗教的方面

賀川によれば幼児の自然は、神の「恵み」としての恩物であり、草花や樹木、昆虫、動物、土や星の姿形は、それ自体が神の摂理の表象とされる⁵⁰⁾。そこで教案では、「遊戯のうちに、美的本能を満足させ、意的方面を教えているうちに、子供を神の方へと導くこと、つまり幼児の芸術的、科学的活動に宗教的な意味づけを与え、彼らに神の「愛」を教える教材の解釈が提案された⁵¹⁾。彼は、幼児の芸術的、科学的活動を通じて発見される自然の「法則」の「奥」に「数学的哲学的な非常にいい頭脳をもった神」が存在し「動物界植物界を支配している」ことは、幼児に容易に理解されうるといふ⁵²⁾。その場合、一方的に教師が幼児に知識として解釈を与えるのではなく、彼らの自己活動のうちに「自然は神の思召しによって出来た」という関係を見とる感受性を尊重した点に特徴がある⁵³⁾。

以下では、その自然の解釈を通じて神の「愛」を経験するための題材と観察、想像活動が、教案でどのように指示されたかに注目しよう。「人を愛することを教えるのもむずかしい」という賀川は、動物の社会生活の観察を機会に社会的感受性を養い、宗教的「愛」で結ばれた人間関係を編む社会化の基礎を幼児に与えようとした⁵⁴⁾。「動物の教え方」では、幼稚園で飼育する小鳥や蜂、小動物の生態観察の手順を、四季を通じて社会生活の変化の分かるように、春の産卵と卵の孵化、親の子の世話、秋の巣作り、冬の冬眠状態という順序で定めていた⁵⁵⁾。これらが、幼児に「宗教道徳的」に与える「いい教訓と暗示」は、次のように述べられている⁵⁶⁾。

「社会生活を研究させるためにも、蜜蜂や蟻を飼っているうちに、母性愛も、互助愛も、その他胎生の研究、共生の研究などもいろいろのことを、知らないうちに覚える。」⁵⁷⁾

すなわち、動物の協同的な社会生活は、その本能的愛情を幼児に示す事例であり、その観察を通じて自然界の社会的な絆を直観させる社会関係の縮図だった。そして「自分の心の内に働いている同じ法則」として、自分と周囲の人々とを関係づける「愛」の感情的絆を想像させる手段として活用されていた⁵⁸⁾。この観察と想像は、幼児のキリスト教的「愛」の直感を基礎に、宗教的規範を内面化させ、実際に「愛」に基づく人間関係を構築させようとする活動だったといえる。教案に直接記されていないが、賀川は『教育革命とキリスト精神』(1949年)で次のように述べる。

「植物も昆虫も魚も魚も不思議に支えられている事実をみて、深い神の恩寵と感謝するようになる。この意識から弱き者に奉仕する精神が湧いて来るのである。」⁵⁹⁾

植物や動物を支える「神の恩寵」、いわゆる神の「恵み」は、『聖書辞典』(日本キリスト教団出版局、1961年)によれば、「神の惜しみなき愛」そのものであり⁶⁰⁾、「恵み」の享受は「それによって神の意志を実現し清い生活を営む」「力」を与えられる経験とされる⁶¹⁾。この記述に従うならば、教案において自然に直接接触して神の「愛」を意識化させる題材と活動は、「神の意志」の実現を日常生活の道徳規範として受容し、これをもとに人と関係を築く精神的態度を準備したといえるのではないだろうか。

このように「幼児自然教案」は、自然の具体的な事物や事象を教材化し、自然に関する学習経験を芸術的、科学的、宗教的方面の三つから重層的に組織する試みであった。これは、当時の幼稚園教育において自然に関する「組織的教案がない」という問題を照射し、幼児の自然事象に関する活動と多様な学問的、文化的専門分野との有機的関連を見いだしながら学習を組織する可能性を示していた⁶²⁾。しかし、自然界のすべてを神の支配する統一的な法則と関連づけて理解しようとする彼の「自然」認識は、自ら乗り越えようとしたフレーベル同様、それぞれの専門分野の多様な教育可能性を神の「愛」という道徳規範の獲得へと一面的に狭める結果をもたらしたといえるだろう⁶³⁾。

C. 幼稚園という場の再定義

しかしその一方で、教案で宗教的「愛」の道徳規範の獲得を目的としたことは、新たに「社会改造」との関連で幼稚園という場を捉え直す別の契機を見いだすものだった。

これまで見てきたように、震災後賀川の社会的実践における課題は、「社会改造」を地域の協同組合組織により進展させるために、被災地の人々に宗教的「愛」の道德規範を内面化させ、人間関係を「愛」の原理に基づく相互扶助の関係に再編することだった。松沢幼稚園は協同組合とは直接結びつかなかったが、「宗教教育の本質」(1930年)にあるように、幼児と教師との教育関係を「職業的」な「縦の関係」から、宗教的「愛」を媒介に「横の関係」として築くことが目指されていた⁶⁴⁾。これは、幼稚園のスローガンに「博愛」を掲げ⁶⁵⁾、赤井米吉が『愛と理性』の標本」とまで称した大崎治郎を副園長に、以下3人のクリスチャンが幼児の教育現場に携わったことからもうかがえる⁶⁶⁾。

この幼児の人間関係を媒介する「愛」は、既存の社会秩序に対する社会化を促す単なる感情的絆ではなく、現在の社会生活の問題を批判的に検討し、新たな局面を戦闘的に切り開いていく精神態度を意味していた。戦後恐慌や帝国主義諸国の利権争い、大震災などを経験する中で著した『魂の彫刻』で、彼は宗教教育は、子どもに対し「貧乏に、病気に、心配に、生存競争に、老衰に、災厄に、死に」などの「悪に打ち勝つ工夫」を伝授するものと考えた。そのとき子どもに認識される「愛」の自覚は、あらゆる「苦難」を克服し「犠牲を払」う内面的衝動であり、かつ「理想の生活」を実現する目的的活動の精神的動機であった⁶⁷⁾。賀川は、教案で幼児の獲得する宗教的「愛」を「悪」から身を守る術策として考察した点で、これを単に人間相互の静的な心的状態とは捉えてはいない。彼の「愛」は現実的な困難に直面したときに、自身の道徳的な価値基準に基づき、これを解決しようと働く内部からの実践的な力とされた。この幼児に獲得される「愛」は、藤田省三(1959年)が生活を闘争と闘争との計画と捉え、現実を批判的に乗り越える想像力を表した「戦闘(防衛)的志向」につながるものといえるのではないだろうか⁶⁸⁾。

では、このような宗教的「愛」の獲得を通じて、幼稚園はどのような場として再定義されたのだろうか。「宗教教育の本質」では、従来の学校教育における「日本的国民教育」の「生存的軍国主義的」な国家主義が批判され、これに対抗する宗教教育が、非暴力非武装の「教育による社会改造」の「根本」として提示された⁶⁹⁾。当時の賀川は、国外で第二次山東出兵、張作霖事件の中国侵略の計画が進行し、国内で共産党弾圧、治安維持法の改悪などの進む昭和ファシズムの前夜ともいえる時期に、高野岩三郎、安部磯雄、吉野作造とともに全国非戦同盟を組織し(1928年)、戦争と軍備、帝国主義活動に反対する平和

活動を展開していた。このことから彼の宗教教育は、ファシズムに抵抗しこれを批判的に乗り越える術策として、宗教的「愛」の道德規範にもとづく「社会改造」の基礎的な作業だったといえるだろう。そして、松沢幼稚園は、自然を通じて幼児を宗教的「愛」の認識に至らせ、かつ教師や仲間との人間関係の編み直しを図る点で、彼の目指す「社会改造」のささやかな実験の場として意味づけ直されたと考えられる。

III. 戦時期の賀川

このように、自然による幼児教育においてファシズムに対する抵抗点を生じさせながらも、賀川自身が、総力戦体制における実感の変化により民族的な全体主義に傾き、結果として軍国主義に同調してしまったのはなぜだろうか。本節では、彼自身がキリスト教と神秘主義を通じて「愛」と結合させた「自然」認識にはらまれた危うさを取り上げたい⁷⁰⁾。

まず、昭和初期の具体的な賀川の言動を見てみよう。上述のように1920年代の賀川は、軍国主義による侵略戦争に反対する一方で、自らの大陸への宗教伝道、協同組合の組織を通じて日本の東アジア進出を指導するという二つの立場を使い分けた。例えば1928年の御大典記念の日本宗教大会の講演「産業の人道化」では、キリスト教の「互助愛」による国内の協同組合組織の普及が高唱され、やがて「民族闘争、階級闘争」を越えて「露西亜と日本と支那と朝鮮」が「共存共栄」していくことが示唆された⁷¹⁾。1931年の満州事変では、日本の軍事的横暴を批判するが、「満州国」設立の事実を前に、キリスト教信者の拡大と国内経済問題の解決の可能性を見て、軍事的侵略の反対よりも「宗教的海外発展」への関心を一層強くしていく⁷²⁾。彼のアジア諸国への伝道は、1928年から30年代にかけて満州、中国、朝鮮、台湾、フィリピンにおいて精力的に展開されていった。このとき、すでに彼は侵略の対象国における国家の既得権益を、国際経済の現実として容認する帝国主義の論理に同調し、キリスト者の立場からアジア諸国で収奪と侵略に抵抗する人々を見いだし救済する観点は抜け落ちている。

もし彼が、日本の経済機構の矛盾を指摘し解決を海外進出に求めるだけでなく、植民地化された地域の人々に対する差別や不当な抑圧の構造を社会的経済的に把握し、彼らを救済する視点を得たならば、彼の宗教的「愛」は国家主義の酔狂的感情から峻別されたはずである。これを阻み彼を戦時下の支配的イデオロギーに接近させたのは、彼の「自然」認識の二つの変容、すなわち感情的

に絶対化された宗教的「愛」の倒錯現象と、日本の自然への回帰により生じる「風景ナショナリズム」の生成ではないだろうか⁷³⁾。

「宇宙一元」(1936年)で「愛による一元こそ絶対」と認識したと記した賀川は、「愛」に基づく感情を絶対化し「愛」による行動規範から論理的な思考枠をはずしていった⁷⁴⁾。1938年の満州伝道で満鉄総裁の松岡洋右に面会した賀川は、松岡の「真剣な宗教的大陸政策」に感涙の情を覚え、彼の漢民族への「愛」に深い感銘を受けたという⁷⁵⁾。それほど強く他国の民族への「愛」に共感するならば、彼にとって、自国日本に対する愛国心はこの上なく絶対的な価値を帯びるものであったことは想像に難くない。1940年「支那事変処理上有害とみとめられる極端な反戦の平和論」の嫌疑で憲兵隊に拘引され松岡の要請で釈放された彼は⁷⁶⁾、その1カ月後の身辺雑記に「国難を前にして国を愛しないことは出来ない」「我々は一人になっても国を守らねばならぬ」と決意を新たに書き記す⁷⁷⁾。注目すべきは、ここでの愛国心の喚起が、留置場で「私の身体の中に」キリストの復活を体験したことと同時に生じていたことである⁷⁸⁾。この感覚的な覚醒体験と「愛」一本の感情が一体となって「愛国」の宗教的陶醉状態を起し、キリストの贖罪愛の実践として国を愛し自らの生命を犠牲にすることが肯定されたのである。

また、賀川の国家主義の源は、彼が宗教的「愛」を見いだしてきた自然の美的心象にもあった。「芍薬の花咲く日本」(1932年)で、彼は「桜は散り、雲雀が野に囀る頃になると、日本の中央山脈から流れ出る」と日本の空想的な風景に心理的に回帰していく傾向を示す⁷⁹⁾。この傾向は、すでに神戸スラム時代から故郷徳島の自然を懐古する場合などに顕著に現れていた。しかし、1930年代頃からは、同時に天照大神や二宮尊徳、西郷隆盛など神話や歴史の登場人物をあげ、土地の風土の育んだ「日本精神」の果敢さや優秀さも高唱されるようになった⁸⁰⁾。彼が留置場という人工的な構築物に閉じこめられた後、積極的な戦争協力に傾いたことを考えれば、この心象風景は藤田のいう「風景ナショナリズム」を準備する原風景ともいえるのではないだろうか⁸¹⁾。自分の心理的故郷であり絶対の帰属感をもつ自然の風景と、その豊穰さを精神的風土とする日本人の歴史的優秀性が重なり合い、賀川の国家主義の意識を支えていたと考えられる。

そして1943年の反戦、社会主義思想による警察の取り調べを挟み、彼の非暴力無抵抗の姿勢は、積極的な戦争協力へと転換した。鶴見俊輔が「賀川の転向」というように⁸²⁾、同年賀川は、国際戦争反対者同盟からの脱退を求めるとともに、米英の帝国主義的植民地支配を排斥し、

日本こそが「東洋の独立と自由」の守護者だと主張する⁸³⁾。同年の詩集『天空と国土を縫合わせて』では、神秘的非合理的な文体で戦意高揚の詩を詠い、日本の聖戦イデオロギーに陶醉する精神状態が見られる⁸⁴⁾。このとき彼の宗教的「愛」は、自国を「愛」するがゆえに、植民地のアジアの人々を戦争の犠牲にする働きを生じさせてしまう「愛」の倒錯現象を引き起こしていたといえる。また同書では、自らを「太陽の子だ私は 日本の子だ 太平洋の生んだ子だ」「正成、義貞、親房の 血をうけついで神の子だ!」という強烈な帰属意識から生じる自己規定に心酔し、「皇国」への犠牲的精神に新しい時代の幕開けを見ろという心情的飛躍を生じさせた⁸⁵⁾。こうして彼は、日本民族の神聖性を唱ってアジアを西欧の物質文明から守り、世界史を神の「愛」により書きかえるという主張を自ら展開していったのである。

おわりに

これまで検討してきたように、賀川は自然を人間が回帰する場、神の摂理を知る媒体として把握し、自然と「愛」を一体化する「自然」認識を形成した。一方彼は、大震災の被災地における社会的実践の課題を協同組合の組織化による「社会改造」と、その精神的基盤を準備する人々の宗教的「愛」の道徳規範の内面化においた。この課題のもとに、幼児に宗教的「愛」を認識させるため、彼の「幼児自然教案」は、次の二つの点で、幼児教育史における自然の教育の独自の境地を切り開いたといえる。それは第1に、自然に関する幼児の学習経験を芸術的、科学的、宗教的方面において重層化する教材の選択、配列と子どもの活動を提示した点、第2に、幼児への宗教的「愛」の内面化を通じて、現実の社会に対する価値判断の基準を準備し、幼稚園を新たな社会関係の創出の場として意味づけ直した点である。

だが一方では、教案の目的が宗教的「愛」の認識に収斂されたため、多様な価値や観念の存在の認識以前に、幼児に先験的な道徳価値や規範を内面化させるという、その教育可能性の矮小化が指摘された。これは、戦時期の賀川が、自らの「自然」認識の変容を踏み台に、総力戦体制の支配的イデオロギーに同調した点を考慮して、教案の「自然」を評価し直すという新たな課題を提起する。確かに、「宗教と教育との交渉点」(1941年)では、自然を通じた幼児教育により日本の「道徳的危機」を脱し「支那人を心服させる」目的が論じられている⁸⁶⁾。しかし、だからといって教案の「自然」を全面的に否定することはできない。それよりも、賀川の「自然」認識の危

うさが何に由来するのかを捉える必要があるのではないかと考える。

ここでは、自然に関する神秘主義感情と科学的態度との拮抗関係と、個人をとりまく緊張的な社会状況の問題を指摘しよう。賀川はスラム、都市文明、関東大震災、戦争の経験を通じ、絶えず個人の緊張状態を強いられ感情や欲望を抑圧されてきた。それゆえに、感傷的で神秘的な宗教感情を形成すると、ここを制止された欲望や興奮の解放のはげ口としたといえる。その彼の獲得した自然科学の科学的知性は、彼の内部で自然を源泉とする神秘的宗教感情と対抗点をもつはずであった。しかし、自然な欲望の抑圧状況では知性は神秘的感情の力ほど強く働かなかったのである⁸⁷⁾。したがって、総力戦体制における実感の変化に応じて大きな感情の飛躍や反転が生じ、国家主義や非合理的迷信を急速に吸収し再生産していく事態に至ったと考えられるのだ。

最後に今後は、(1)賀川の自然認識を日本の自然主義や生命主義の系譜において捉え直すこと、(2)彼の幼児教育論を、彼が名を挙げるルソー、ペスタロッチ、フレーベルなどの教育論と比較検討しその歴史的配置を試みること、(3)「幼児自然教案」の個別の単元における教材の選択と活動の組織内容を検討することを課題としたい。

(指導教官 佐藤学教授)

(付記 引用文・論文名などの旧漢字・旧仮名遣いは現代表記に改めた。)

注

- 1) 賀川豊彦『自然と性格』, 基督教保育連盟, 昭和8年, p.1
- 2) 1888年神戸の回漕店に生まれる。両親の死後徳島に移り1904年キリスト教に入信, 1905年徳島中学を卒業, 明治学院高等部神学予科に入学し2年後神戸神学校に転校した。1909年神戸のスラムに路傍伝道に入り社会事業を展開。1914-17年プリンストン大学, 神学校へ留学, 実験心理学, 生物学を修める。帰国後キリスト教伝道活動の傍ら1919年友愛会関西総同盟理事長就任, 1921年日本農民組合を杉山元治郎らと結成, 灘購買組合設立など幅広い活動を開始する。戦後は1945年東久邇内閣に参与し, 1960年71歳で死去。彼の法人団体による幼児施設は, 光の園保育学校(1928年), 一麦保育園(1932年), 友愛幼児園(1935年)ほか20近くにのぼる。
- 3) 佐藤照雄「次の世代に何を伝えるか」『ハイスクールニュース』第11巻第7号, 学校図書, 1988年, 杉原四郎「賀川豊彦の自然教育論」『教育研究展望』175号, 神戸市立教育研究所, 1988年, 宍戸健夫「死線を越えて我は行く—善隣幼稚園から友愛幼児園へ—」『保育の森』, あゆみ出版, 1994年, 三原容子「『雲の柱』の教育論」『賀川豊彦研究』第22号, 本所賀川記念館, 1996年ほか。
- 4) 賀川豊彦『魂の彫刻』『賀川豊彦全集 第6巻』, キリスト新聞社, 1963年, pp.161-178
- 5) 鎌田正「若き日の賀川豊彦の読書目録」『興文』2月号, 教文館, 昭和41年, pp.2-6, 賀川も「大正生命主義」の系譜に連なり, トルストイの自然の大きな生命の流れの観念, ショーペンハウアーの「宇宙の意志」, エマソンの自然界の汎神論的な「宇宙の生命」の観念などの強い影響を受けた。「大正生命主義」については, 鈴木貞美『大正生命主義と現代』河出書房, 1995年, および鈴木貞美『「生命」で読む日本近代』, NHK ブックス, 1996年に詳しい。
- 6) 賀川「貧民窟の自然美論」『雄弁』, 大日本雄弁会, 大正9年
- 7) 山崎俊生「賀川豊彦の再生体験」『国際宗教ニュース』第13巻第4号, 国際宗教研究所, 1972年
- 8) 賀川豊彦『イエスの宗教とその真理』『賀川豊彦全集 第1巻』, キリスト新聞社, 1963年, p.135
- 9) 同上, p.136
- 10) 賀川豊彦『精神運動と社会運動』『賀川豊彦全集 第10巻』, キリスト新聞社, 1964年, p.315
- 11) 賀川豊彦『愛の科学』『賀川豊彦全集 第7巻』, キリスト新聞社, 1963年, p.190
- 12) 賀川豊彦『地球を墳墓として』『賀川豊彦全集 第21巻』, キリスト新聞社, 1962年, p.306
- 13) 同上, p.291
- 14) 賀川豊彦『神と永遠への思慕』『賀川豊彦全集 第2巻』, キリスト新聞社, 1963年, p.217
- 15) 同上, pp.210-220
- 16) 賀川豊彦『人間苦と人間建築』『賀川豊彦全集 第9巻』, キリスト新聞社, 1964年, p.165
- 17) 賀川豊彦「闇も日本に退屈を感じていないか」『雲の柱』第3巻第8号, 1924年
- 18) 賀川『愛の科学』, 前掲書, pp.177-179
- 19) 同上, p.178
- 20) 賀川豊彦「宗教教育の原理」『雲の柱』第4巻第1号, 警報社, 1925年, pp.30-37
- 21) 詳細は拙稿「賀川豊彦の保育思想とその実践—「組合社会」における教育—」(1996年東京大学大学院教育学研究科修士論文, 未発表), pp.78-113
- 22) 賀川『魂の彫刻』前掲書, pp.162-172
- 23) 「松沢教会 同幼稚園 日曜学校建築随意書」, 昭和5年, 賀川豊彦記念松沢資料館蔵
- 24) 金子啓一「賀川豊彦の『神の国運動』を探る—経過・理念・行方から—」『賀川豊彦研究』第19号, 本所賀川記念館, 1990年
- 25) 賀川豊彦「神の国運動は失敗だったか?」『雲の柱』第12巻第8号, 雲の柱発行所, p.36
- 26) 賀川豊彦「武蔵野の森陰より」『雲の柱』第12巻第8号, 雲の柱発行所, p.49
- 27) 賀川豊彦「宗教教育に自然教案を提唱す」『兄弟愛運動』第36号, 兄弟愛運動社, 1934年
- 28) 賀川豊彦「幼児自然教案」『賀川豊彦全集 第6巻』, キリスト新聞社, 1963年, p.448
- 29) 徳富蘆花『自然と人生』, 岩波文庫, 1933年, pp.64-65
- 30) 「松沢幼稚園規則」, 賀川豊彦記念松沢資料館蔵, 発行年不詳
- 31) 「松沢教会と私」, 松沢教会50周年記念誌編集委員会, 1981年
- 32) 賀川『魂の彫刻』前掲書, p.163
- 33) 賀川「幼児自然教案」前掲書, p.459
- 34) 賀川豊彦「自然と性格」, ガリ版プリント(B4)21枚, 賀川豊彦記念松沢資料館蔵, 発行年不詳, (この事業に関しては前掲拙稿, pp.11-38)
- 35) 賀川「幼児自然教案」前掲書, p.460
- 36) 賀川『自然と性格』前掲書, pp.13-14
- 37) 賀川「幼児自然教案」前掲書, p.450
- 38) 同上, p.459
- 39) 同上, p.457
- 40) 賀川「自然と性格」前掲プリント
- 41) 賀川「幼児自然教案」前掲書, p.448
- 42) 同上, p.466

- 43) 同上, p.447
 44) 同上, p.466
 45) 賀川『自然と性格』前掲書, p.18
 46) 中村雄二郎は、ルソーの「共通感覚」にもとづく人間関係の形成において、ルソーのロゴスを含んだ自律的なまとまりとして感情を捉えた点を考察している（『中村雄二郎著作集 第一巻』, 岩波書店, 1993年）。
 47) 賀川「幼児自然教案」前掲書, p.464
 48) このため、大きなタンポポやソラマメの花の模型、数十種類の木の幹の標本などの教材もそろえられた。
 49) 賀川「幼児自然教案」前掲書, p.464
 50) 賀川『自然と性格』前掲書, p.9
 51) 賀川「幼児自然教案」前掲書, p.460
 52) 賀川『自然と性格』前掲書, p.14
 53) 賀川「幼児自然教案」前掲書, p.447
 54) 賀川『自然と性格』前掲書, p.2
 55) 賀川「幼児自然教案」前掲書, p.469
 56) 同上, p.469
 57) 同上, p.469
 58) 賀川豊彦『宗教教育の本質』『賀川豊彦全集 第6巻』, キリスト新聞社, 1963年, p.256
 59) 賀川豊彦「教育革命とキリスト精神」, イエスの友叢書第一号, 昭和23年, p.17
 60) 『聖書辞典』, 日本キリスト教団出版局, 1961, p.582
 61) 同上, p.795
 62) 賀川「幼児自然教案」前掲書, p.455
 63) 鳥光美緒子「フレーベル～幼児教育の意味と方法」, 宮沢康人編『近代の教育思想』, 放送大学教育振興会, 1993年
 64) 賀川「宗教教育の本質」『日曜学校』, 日本日曜学校教会, 1930年, p.23
 65) 「松沢幼稚園規則」賀川豊彦記念松沢資料館蔵, 発行年不詳
 66) 赤井米吉「大崎治郎さんのこと」, 大崎すて子『大崎治郎追憶集』, 1971年
 67) 賀川『魂の彫刻』前掲書, pp.147-149
 68) 藤田省三は、経験的自然と一体化した静的な美的感情には、この志向性は生じないと論じるが、賀川の場合は、自然への審美的観念は内面的な衝動へ転じるものだった。藤田『転向の思想的的研究』, みすず書房, 1997年, p.36(初出は思想の科学研究会編『共同研究 転向』上巻, 平凡社, 1959年), イーファー・トゥアン, 阿部一訳『感覚の世界—美・自然・文化』, せりか書房, 1994年
 69) 賀川「宗教教育の本質」同上, p.23
 70) 佐藤(1997)が城戸幡太郎を検討したように、1941年以降賀川の「社会改造」の目指す「組合国家」の革新的国家像、彼の天皇制容認の態度の政治的立場からこの疑問に答えることもできようが、この問題は別稿にゆずる(佐藤広美『総力戦体制と教育科学』, 大月書店, 1997年)。
 71) 賀川豊彦「御大典記念, 日本宗教大会紀要」掲載講演, 『賀川豊彦全集 第24巻』, キリスト新聞社, 1964年, pp.381-387
 72) 賀川豊彦『神と苦難の克服』『賀川豊彦全集 第2巻』, キリスト新聞社, 1963年, p.419
 73) 藤田は、亀井勝一郎の例をあげて監獄の持つ距離感から生じる風景の「空想的錯覚」から生じた転向形態を論じている。前掲書, p.237(初出は思想の科学研究会編『共同研究 転向』下巻, 平凡社, 1962年)
 74) 賀川豊彦『黎明を呼び醒ませ』『賀川豊彦全集 第22巻』, キリスト新聞社, 1964年, p.292
 75) 賀川豊彦「身辺雑記」『賀川豊彦全集 第24巻』, キリスト新聞社, 1964年, p.258
 76) 横山春一『賀川豊彦伝』, 覚醒社, 1959年, p.390
 77) 賀川「身辺雑記」, 前掲書, pp.258-259
 78) 同上, p.314
 79) 賀川『神と苦難の克服』前掲書, p.464
 80) 同上, pp.383-386
 81) 藤田, 前掲書, p.237
 82) 鶴見俊輔他『日本の百年2 廃墟の中から』, 筑摩書房, 1961年, p.149
 83) 安藤肇『深き淵より—キリスト教の戦争体験』, 教文館, 1959年, p.154
 84) 賀川豊彦『天空と黒土を縫合せて』『賀川豊彦全集 第20巻』, キリスト新聞社, p.129
 85) 同上, pp.130-131
 86) 賀川豊彦「宗教と教育との交渉点」『雲の柱』第18巻第7号, 雲の柱社, 昭和14年
 87) W ライヒ, 平田武靖訳『ファシズムの大衆心理 上』, せりか書房, 1970年